

汲古一巻

『右脚一線の教え』

昭和二十一年の紀元節の朝、ラジオを聴いていると、科学界の有名な学者や岩波書店の主人岩波茂雄氏などにまじって、梅若万三郎氏が文化勲章をもらつたというのを伝えている。岩波書店の主人には、われわれも読書人のひとりとして、本当に何か感謝の意を表する機会がほしいものだと思つていたが、今度文化勲章をもらわれたというのを聞いて、なにか宿題を果たしたよううれしさを感じた。しかし私にとつては、それにもまして梅若万三郎氏が文化勲章をもらつたことはうれしのである。というのは、実は私はこの梅若万三郎氏によつて、思いがけない芸術上の大恩恵に浴しているからである。

昭和五年か四年の秋だつたと思うが、私の門人で常泉という男が、私を誘つて牛込の矢来にあつた観世喜之さんの九皇会の舞台へ能楽を見に連れていってくれた。この常泉という男は、ある保険会社に勤めていたが、それ以前に一寸わん屋とかいふ謡曲関係の出版屋にいたことがあるというので、この方面に多少のわたりがあるのであつた。で、この日も私の能楽好きを喜ばせようと、どこかで切符を都合してきてくれたのであつた。もう大分古いことなのでその日の演能が何であつたかも忘れてしまつたが、一番の能がすんだあとで、二、三番の仕舞があつた。この仕舞のとき梅若万三郎氏が、あの堂々たる体軀で「実盛」を舞われた。

私は謡曲のことは、聞いて楽しむことのほか何も知らないし、また能楽も全く観客として鑑賞する以外に何の素養もない男なので、どうも仕舞というものには能楽ほどの興味を持つてなかつた。ところが、梅若万三郎が扇を持って手塚太郎に首掻き落されるというしぐさをする時、ぐつと右脚を前に出して、おもむろにスウツと後ろへ引いた脚、その脚を引く時にもつていた呼吸の力、大きく静かな一呼吸によつて満身の力を途中で少しも緩めずにだんだんと手前へ一線を引きながら引きつけた脚の力、私は吃驚してしまつた。最初、あまり気のりしないで見ていたが、いつの間にか吸いつけられたもののように、ほとんど梅若氏と一緒に舞つていたので

はないかと思つて、呼吸をつめて力をこめて、この仕舞のうちへ惹き込まれていたのであつた。というのは、この仕舞が終わった時には、私自身一曲舞つたほどの疲れを感じていた。そしてこの右脚を一呼吸の力の充満のままに、引きつけていく物凄い迫力が、瞬間私の頭へ書の一線の引き方に対するあるヒントがかすめ去つた。ハット思つた途端、途端というほどの時であつた。私は筆を持つた手つきで、あの脚の満々たる力の張りのままの調子で一呼吸を持続しつづ一線を引いてみた。出来る。出来る。たしかに出来る。私はもうグズグズしていられた。手廻りの品物や本などを鞆に入れるやいなや、常泉君にはろくな挨拶もしないで、この見所を飛び出してしまつた。

帰りの電車の中でも、私は気が狂つたように何遍も何遍も、筆を持つた気持ちで、あの脚で一線を引いた力を右手でまねていた。夕方から夜の更けるまで書いた。書いた。どのくらい書いたか、書道の方で懸針とか鉄線とか垂露などという類の線、どれを引いても初めて力の充ち満ちた一線をなすことが出来た。私は感激してこの一晩、全くるくろく寝ることも出来ないほどうれしくて、夢と現実との間の中で明け方まで、タテの線ばかり引いていたことを記憶している。

書に志してからもう五十有余年にもなるが、こんなうれしかつたことはない。どうしても出来なかつた、この種の一線は梅若万三郎氏の脚によつて教えられた。のみならず、ここで私は本當にあらゆる芸術が全く同じ理の上に構成されていることも、実験的に覚ることが出来た。爾来今日まで、この推理であらゆるものを鑑賞し、またあらゆるものに書道の秘奥を発見することが出来た。

実に梅若万三郎氏の脚の恩たる、私にとつては偉大なるものであつた。しかしこれは畢竟同氏の芸術がいかに鍊磨された、高い高いものであるかを思わしむるものだ。私の梅若万三郎氏の芸術に対する尊敬はこの時から始まり、今なお「右脚一線の教え」に恩を感じているのである。そしてまた梅若氏みずからは絶対あざかり知らないことなのである。ただこの報恩のために、私は自分の門下に対しこの覚りの急所の部分を惜し気なく懇切に示しているばかりである。